

農業新聞「野良ばなし」

「 冬至は冬なか冬はじめ 」 15.12.18

冬至は二十四節気の一つで、暮らしに溶け込んだ 12 月の言葉。今年は 4 日後の 12 月 22 日。この日は太陽が最南から地球を照らし、日本などの北半球では 1 年中で昼間の時間が、ほぼ一番短くなる。

さて、「冬至は冬なか冬はじめ」という言葉がある。これは、黄道上の太陽の天文位置（赤経・赤緯）と気象の推移を合わせて表現したもの。暦では冬至は冬の真ん中。厳しい冬の寒さは、実はこの頃から本番を迎えるという意味。

例えば、東京で最低気温が 1 度台となってくるのは、1 月上旬から 2 月上旬にずれている。また、北関東から瀬戸内に至る太平洋側の地方でも、12 月下旬から 2 月下旬が最も寒い時期に当たっている。

ところで、日本の気象官署における最低気温の極値は、明治 35 年 1 月 25 日に旭川で観測された氷点下 41.0 度。この日は列島を猛烈な寒波が襲い、奇しくも青森頓営の第五連隊第二大隊が八甲田山で演習中に大遭難した日。

今年は予測しがたい異常な天候が続いている。11 月の東京の平均気温は平年より 1.4 度高く、降水量は 230mm（平年比 2.5 倍）を観測。四国や九州の太平洋側の地方で季節外れの大雨を記録。

二酸化炭素の増加に伴う地球温暖化が顕著となる前は、太平洋側では、冬至の頃を中心にカラカラ天気が続くことが多かった。無降水継続日数の東京の最長記録は昭和 48 年 11 月 11 日から翌年 1 月 20 日の 71 日間。

効果的な温暖化対策がなされなければ、将来日本で、高温・多雨の天候が継続する恐れがある。冬場に、農作物の病害虫発生や徒長を防ぐ新たな野良仕事がない事を祈っている。

（ 気象情報システム株式会社 高 津 敏 ）